

広告

▶8月4日から6日の第2期「楽宿」に参加した子どもたちとレクリエーションボランティアTeam Recrew (チームレクルー)。日本レクリエーション協会、福島レクリエーション協会、日本レク協会公認指導者、福島介護福祉専門学校、仙台大学の学生も参加。



▼紐で繋がった2個のボールをラダー (はしご) に向けて投げるラダーゲッター。ラダーに紐を巻き付けると得点に。



▼離れた場所にあるバスケットに向けてフライングディスクを投げるディスクゴルフ。ルールはゴルフと同じ。



▲台の上に置いたボールをバットで打つティーボール。中には飛ばし過ぎて、遠くまでボールを拾いに行く子どもも。

▼ディスクゲッター。ターゲットパネル目掛けてフライングディスクを投げ、射抜いたパネルの枚数を競います。



「楽宿」に参加して 思い切りスポーツを楽しんだ

双子の弟と一緒に来ました。「楽宿」では、キャンプファイヤーをやったり、外でご飯を作って食べたりしました。特に楽しかったのが、今やっているチャレンジ・ザ・ゲーム大会です。ディスクゲッターの1回目の得点は15点でした。他の種目も仲間と力を合わせて頑張っていて、いい成績を残したいです。

武藤 悠平くん
(いわき市立中央台北小学校5年)

思い出も友だちもいっぱい

お友だちと一緒に参加しました。自然いっぱいの広い場所で、毎日みんなと遊べて、超楽しいです！一番楽しかったのは水鉄砲大会。自分たちで水鉄砲を作り、その後、水鉄砲大会をしました。私は水をかけられませんでした。ボランティアの人たちがみんなに水をかけられて、ビショビショになっているのを見て、思わず笑ってしまいました。

鈴木 栄利佳ちゃん
(いわき市立横小学校5年)



独立行政法人日本スポーツ振興センター 東日本大震災復興支援事業

夏の森に響く 子どもたちの笑顔と歓声



独立行政法人日本スポーツ振興センターは東日本大震災緊急復興支援事業として、スポーツによる被災地の子どもたちの心のケア活動の一環で、公益財団法人日本レクリエーション協会の「レクリエーション活動を通じた被災地の子ども・高齢者支援活動」を全面的に支援しています。

今回の支援事業は、猪苗代町の国立磐梯青少年の家で8月1日から9日にかけて行われた福島県内の小学生約180名が参加した、ネイチャー&レクリエーション「楽宿(がっしゅく)」。その活動の様子や、子どもたちの心のケアなどについて、日本レクリエーション協会の鈴木二三彦さんにうかがいました。

※この活動にはスポーツ振興くじ(toto・BIG)の収益が役立てられています。

主催：公益財団法人日本レクリエーション協会 共催：NPO 法人福島県レクリエーション協会 後援：福島県、福島県教育委員会



日本レクリエーション協会 鈴木 二三彦さん

子どもらしく自然の中でのびのびと

子どもたちの様子を見続けてきた鈴木さんは「子どもたちは心が弱っている」と言います。「子どもたちからは、大人に甘えたいとか、そばにいてほしいという気持ちを強く感じます」

戻ってからの心のケアを考えていく

鈴木さんにお話をうかがったのは第二期の最終日に森の中で行われたチャレンジ・ザ・ゲーム大会の休憩時間。それまで子どもたちは八つの班に分かれて四種類のゲームに挑み、班ごとに得点を競っていました。「楽宿」に参加したのは、放射線の影響で外遊びができない県内の小学生たち。でも、ここでは、みんな笑顔。同じ班の仲間が得点を上げるたび、笑い声が森の中に響きわたります。一見、明るさを取り戻したように見える子どもたちですが、被災地で子

日本レクリエーション協会では、「被災地に笑顔を届けよう！」をキャッチフレーズに「笑顔 Again」プロジェクトを行い、東日本大震災の被災地へボランティアスタッフを派遣。レクリエーション活動を通して、被災者の体の心のケアを行うとともに、人とのふれ合いを育むプログラム

を実施しています。今回の「合宿」もその一環として行われました。「楽宿」で子どもたちは、屋外でのカレーライス作り、料理コンテスト、キャンプファイヤー、水鉄砲作りと水鉄砲大会、ハイキング、チャレンジ・ザ・ゲーム大会などを体験。夏休みのひととき、同世代の仲間たちと楽しい時間を過ごしました。「でも、大事なのは、子どもたちが避難先や仮設住宅などに戻ってからの心のケア。その環境づくりを含め、私たち大人がみんな考えていく必要があると思います」 「楽宿」は終了しましたが、日本レクリエーション協会では今後も岩手、宮城、福島のレク協と共に、子どもたちの遊び場をつくるボランティア活動を定期的に続ける予定です。

